ISSN 1881-1817

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館ニュース

No.5
Autumn
2006

『近世水滸伝』

目　次

■賛助会員制度（友の会）の創設 ……2
■お知らせ ……3
立川移転までの主なスケジュール
秋季特別展・シンポジウム
第30回　国際日本文学研究集会
複写料金の改定について
■トピックス ……6
子ども見学デー
学術交流協定の締結
■大学院教育 ……7
総合研究大学院大学平成19年度入学者募集
■研究余滴「スミスの日本昔話」 ……8

賛助会員制度（友の会）の創設

日本人は、今日まで約1200年にわたり、日本文学を維持してきました。古代の『万葉集』、平安時代の『源氏物語』、さらには中世、近世、近代と生み出されてきた、世界でも類を見ない膨大な日本文学作品の数々、そこには日本人の豊かな心がたたえられ、文学だけではなく、絵画、芸能にいたるまで日本文化の基盤ともなり、人々にやすらぎを与えてきました。

国文学研究資料館では、この貴重な文化遺産を次の世代に受け継ぐとともに、調査研究し、成果の社会還元もしていきたく願っています。具体的には、日本文学研究の成果等の出版活動、インターネットによる国内外への情報発信、貴重な資料の展示会、日本文学の講演会及び講座等も計画していく所存です。さらに、海外における日本研究者との交流、日本文学の共同研究と普及、国内外の若手研究者の育成、他の研究機関との学術交流の促進なども図っていくことを目指し、日本文学研究の世界的拠点として活動し、新しい人文学研究の創造に努めたく思っています。

国文学研究資料館では、この趣旨を実現するため、賛助会員制度（友の会）を創設し、広範なご支援をいただけるよう準備しております。この創設には、秋山虔氏、瀬戸内寂聴氏、ドナルド・キーン氏などの著名な方々からの推薦もいただき、深く感謝する次第です。どうかこの意義に御賛同いただき、国文学研究資料館への倍旧の御理解、御支援を賜りますよう、衷心からお願い申し上げます。

瀬戸内寂聴氏と伊井館長

賛助会員として御寄附いただいたお金は、すべて人間文化研究機構国文学研究資料館への寄附金となり、以下の活動の資金とさせていただきます。

- ○　国内外における日本文学の研究活動支援。
- ○　日本文学研究の若手研究者の育成と研究支援。
- ○　国内外の研究機関との共同研究、学術交流。
- ○　日本文学関連研究資料の収集。
- ○　講演会、展示、講座等による研究の社会的な還元。
- ○　その他、当館の目的を達成するための事業の実施。

また、賛助会（友の会）会員の皆様には、国文学研究資料館で実施する講演会、展示、シンポジウム、講座の案内を差し上げるとともに、国文学研究資料館で販売している書籍を優待価格で購入していただけます。

表紙絵解説『近世水滸伝』（きんせいすゐこでん）
「篠崎の政吉　坂東彦三郎」大判錦絵、文久2年（1862）7月改印、3代目歌川豊国画。仮名垣魯文暗記の略伝。講釈『天保水滸伝』の洲崎の政吉は、飯岡助五郎の一の子分。笹川への飯岡方の襲撃の折り、槍に刺されて死ぬ。当時の人気歌舞伎役者5代目坂東彦三郎の似顔で描かれる。

お知らせ

●立川移転までの主なスケジュール

当館は平成19年度に立川市緑町に移転する予定です。

現在、立川新施設の工事は、順調に進んでおり、来年度には移転の準備作業のため臨時に閲覧業務の休止を予定しています。

また、それ以前に現施設のアスベスト撤去作業のため、平成18年度末にかけて閲覧業務の休止を予定していますので、利用者の方々の御理解・御協力をお願いします。

建設中の新施設

平成19年 1 月　●　閲覧業務休止

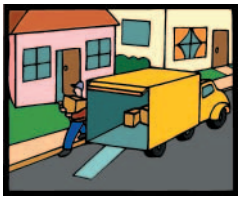
（アスベスト撤去工事）

平成19年 4 月　●　閲覧業務再開

平成19年 5 月　●　春季特別展

平成19年秋　●　閲覧業務休止

（移転準備作業）



平成20年 2 月　●　立川新施設に引越

平成20年 4 月　立川新施設で閲覧業務再開

平成20年 5 月　移転記念式典・記念展示

秋季特別展

仮名垣魯文百覧会（ROBUN）

日本文学研究史において空白部分を多く残す幕末・明治開化期文学に照明を当て、新たな研究動向を開拓する試みとして、当時の戯作界の雄と目される仮名垣魯文をとりあげます。〈江戸の残照〉〈開化の寵児〉〈報道する戯作者〉〈魯文の交友圏〉等、テーマごとに6ブロックに分けて資料を展示する予定です。戯作者魯文が生きた波乱と変動の時代とともに、彼の文業を通覧します。

日時：平成18年10月17日（火）～11月2日（木）
（土・日曜を除く）10:00～16:30

場所：国文学研究資料館　展示室〈入場無料〉

展示予定書目

◆当館所蔵
「西洋道中膝栗毛」「牛店雑談　安愚楽鍋」
「高橋阿伝夜叉譚」
「珍猫百覧会開筵」引札、魯文自筆原稿・葉書等。

◆毎日新聞社新屋（あらや）文庫（※）から
・郵便報知新聞創刊予告、平仮名絵入新聞引札、日新堂支局文象社新聞書籍縦覧所広告等の明治初期新聞関連資料。
・「東京各社　撰抜（よりぬき）新聞」のうち“高橋阿伝”、「見立多以尽（みたて　た　いづくし）」のうち“とりけしたい”等の錦絵。
・グラント氏接待夜会招待状（差出人：東京接待委員総代　渋沢栄一・福地源一郎）他を予定。

※新屋（あらや）文庫
大正から昭和初期にかけて大阪毎日新聞記者として活躍、後に近衛文麿の秘書となった新屋茂樹氏（1886～1946）の蒐集した幕末・明治期の新聞雑誌を中核とする屈指のコレクションです。
氏の死後、毎日新聞社に寄贈され（昭和42年）、原則非公開の資料となっていますが、今回の展観にあたり、毎日新聞社のご厚意により魯文関連引き札をはじめ、当時の新聞発行をめぐる貴重な資料をお借りすることとなりました。

シンポジウム

江戸から明治へ －仮名垣魯文を中心として－

パネリスト
佐々木亨（徳島文理大学教授）　「魯文の時勢順応主義を考える」
山本和明（相愛大学教授）　「憧憬と継承－魯文の果たしたこと」
青木稔弥（神戸松蔭女子学院大学教授）　「魯文 vs 諭吉」

コーディネーター　谷川惠一（国文学研究資料館教授）

日時：平成18年10月20日（金）　16:00～18:00
場所：国文学研究資料館　大会議室〈入場無料〉　先着120名

本展示及びシンポジウムは、国文学研究資料館複合領域研究系「開化期戯作の社会史研究」プロジェクトによる研究成果です。

第30回　国際日本文学研究集会

30th International Conference on Japanese Literature

テーマ：「表象と表現」

プログラム

平成18年11月9日（木）

【第1セッション】研究発表　13：10～
座長　ロバート　キャンベル（東京大学助教授）
①『通俗忠義水滸伝』をめぐる諸問題　　中村　綾（京都府立大学研修員）
②『三国志画伝』における『通俗三国志』の解釈 ―挿絵を手掛かりとして―
梁蘊嫻（東京大学大学院）
③江戸時代庭園における西湖景観の表象と表現 ―漢詩文史料の考察を通して―
李偉（総合研究大学院大学）

【第2セッション】研究発表　15：10～
座長　山下則子（国文学研究資料館教授）
④馬琴の黄表紙における表象と表現の類型に関する試論
Kristian BERING（SOASロンドン大学大学院）
⑤〈膝栗毛もの〉絵双六の表象と表現　　康志賢（全南大学校副教授）
⑥「伎楽」追跡考 ―東アジア仮面劇・芸能研究の一端として―
徐禎完（翰林大学校教授）

【ポスターセッション】17：10～
座長　伊藤鉄也（国文学研究資料館助教授）
①『古今和歌集』における桜歌についての考察
関士（お茶の水女子大学大学院）
②大正大学蔵『源氏物語』の書写環境について　　唐暁可（埼玉大学大学院）
③韓国語訳『源氏物語』に於ける巻名の付け方について
李芝善（埼玉大学大学院）
④日本文学におけるタイ表象 ―オリエンタルなロマンスを求めて―
METHASATE Namthip（チェラーロンコーン大学専任講師）

【レセプション】18：20～

平成18年11月10日（金）

【第3セッション】研究発表　10：30～
座長　横井　孝（実践女子大学教授）
⑦見ぬ人見ぬ世見ぬ鏡 ―和歌の幻想される場所として―
王軍合（東京外国語大学大学院）
⑧惜別の抒情 ―『古今和歌集』源実の惜別の歌群と「をり」の表現意図―
江藤高志（大阪市立大学大学院）
⑨『伊勢物語器水抄』における秘伝の意義 ―帰納的なアプローチによって―
Jamie L. NEWHARD（アリゾナ州立大学助教授）

【第4セッション】研究発表　13：30～
座長　坪井秀人（名古屋大学教授）　関　礼子（亜細亜大学教授）
⑩従軍と「写実」 ―国木田独歩の「朝鮮」記事を中心に―
水野達朗（高麗大学校助教授）
⑪日本語時代の台湾文学 ―短歌結社「新泉」と宇野覚太郎―
頼衍宏（銘傳大学専任講師）
⑫葛藤する「郷土」 ―呉希聖「豚」における植民地台湾の表象―
呉亦昕（筑波大学大学院）
⑬「記憶・忘却」装置としての文学 ―戦後初期中学校「国語科」教科書を中心に―
朴貞蘭（名古屋大学大学院）

【公開講演会】16：05～
果たして戦後が終わったのか ―日本戦後文学史読み直しへの試み―
Mostafa, Ahmed Mohamed Fathy（カイロ大学教授）

【総括】17：05～　小峯和明（立教大学教授）

●複写料金の改定について

当館では、紙焼写真等の複写料金を、原材料費等の値上がりのため、平成18年11月1日から以下のとおり改定します。

種　別	規格	料金　（　）は人間文化研究機構内料金		備　考
		～平18. 10. 31	**平18. 11. 1～**	
紙焼写真	A5	65円(55円)	**90円**	改定後は、人間文化研究機構内外ともに統一料金。
	B5	95円(85円)	**100円**	
	A4	115円(105円)	**110円**	
	B4	180円(155円)	**170円**	
ポジフィルム	35mm	15円(10円)/ｺﾏ	**1,050円/100ｺﾏ**	100ｺﾏ以上は100ｺﾏ単位で積算。

トピックス

●子ども見学デー

当館では、去る8月22日（火）に小学生を対象とした「子ども見学デー」を開催しました。当日は、近隣の小学生と保護者合わせて30数名が参加しました。

「昔の遊びと昔の本」と題した講義は、歌舞伎を題材とした昔の娯楽についての説明が行われ、参加した小学生も進んで発言するなど、和気あいあいとした講義でした。

「江戸時代の勉強方法」と題した講義は、昔の寺子屋の様子や江戸時代の習字の手本が紹介され、昔の机やそろばんの実物を見ながら説明が行われました。

講義の合間には、江戸時代の本に直接触れるなどして、親子揃って昔の本に親しみました。

講義風景

様々なそろばんの説明

●学術交流協定の締結

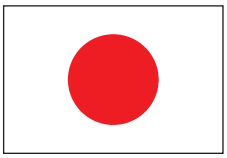
当館では、今年７月、北京外国語大学北京日本学研究センター（中華人民共和国）と学術交流協定を締結しました。

北京日本学研究センターは中国における日本学研究の中心的機関であり、当館としても協定を締結することによって、今後の中国における日本文学研究状況の調査や文化交流の充実を図り、両国の日本文学研究の発展を期待しています。

今回の協定については、昨年８月に北京日本学研究センター長の徐一平氏から打診があり、当館において両国の学術交流推進を検討し、両機関で合意が得られ、今回の協定締結にいたりました。

協定の調印には、伊井館長が直接北京に赴き、現地の日本文学研究者と交流を深めました。

伊井館長（左）と徐一平センター長（右）



大学院教育

大学院博士後期課程　平成１９年度入学者募集

総合研究大学院大学文化科学研究科　日本文学研究専攻

概要　大学院博士後期課程　定員3名
複数教員による教育・研究指導（主任指導教員1名・副指導教員2名）

教育研究指導分野　共　通　科　目：文学資源情報の研究
文学資源研究：原本実態を多角的に究明
文学形成研究：文学の形成と受容史の考察
文学環境研究：隣接諸学との連動

願書受付　平成18年12月8日（金）～14日（木）必着

選考方法　修士論文等の審査
面接：平成19年2月7日（水）・8日（木）

お問い合わせ先　Tel. 03-3785-7131（代表）

学生募集要項請求　募集要項の請求は、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記し、「希望する募集要項：5　平成19年度4月入学　文化科学研究科日本文学研究専攻　博士後期課程」と記入の上、下記メールアドレスまで送信してください。

メールアドレス：kousei@soken.ac.jp

研究余滴

伊井春樹

スミスの日本昔話

イギリス生まれのリチャード・ゴードン・スミスが初めて日本を訪れたのは1898(明治31)年12月の40歳、その後幾度か帰国をしたものの、大半は神戸に居を構え、1915(大正4)年まで住んでいたことは、現存する8冊の日記によって知られる。日本の宗教や文化に関心を持ち、さまざまな見聞を記録し、日記に多数の写真も貼りこむ。天狗や河童、そこから伝説、神話などにも興味を持ち、昔話を日記に書き入れ、絵師に挿絵も描かせる。日記には書ききれなくなったのか、別冊として5冊の昔話集も存する。

文部省督学局の服部一三がニューオリンズでの万国工業綿花博覧会に派遣されたのは明治17年、そこに新聞記者として取材していた、ギリシャ生まれでイギリス人のラフカディオ・ハーンと知り合う。ハーンは23年に来日、出雲の中学校教師を斡旋したのは服部と『古事記』を翻訳したチェンバレンであった。ハーンは熊本第五高校、神戸クロニクル社主幹、東京帝大講師となり、36年に突如解任され、後任となったのが留学から帰国してきた夏目漱石だった。

服部は、その後33年から大正5年まで兵庫県知事の職にあり、親しくしたのがスミスであった。ハーンが神戸を離れて5年後にスミスが同じ地に住むようになり、服部と親密な仲となる。スミスの日記にしばしばハーンの名が記され、自分の集めた怪談話との違いも指摘する。二人は面識がなかったものの、共通の友人服部から情報は得ていたのであろう。スミスが日本の怪奇な話に夢中になったのも、ハーンの影響があったのかも知れない。スミスの手によって収集された挿絵入りの昔話は、およそ250余話が現存する。

スミス日記巻7表紙

国文学研究資料館ニューズ　No. 5

発行日　平成１８年１０月 ６ 日
編　集　広報委員会
発　行　人間文化研究機構　国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature
〒142-8585　東京都品川区豊町１－１６－１０
℡:03-3785-7131 Fax:03-5751-7166 http://www.nijl.ac.jp
印刷所　有限会社　スミダ
©人間文化研究機構　　禁無断転載

当館では、古典籍及び図書の寄贈を受け付けております。御刊行・御所蔵の資料を広く研究に活用させていただくために、皆様のご協力をお願いいたします。

「和刻本研究事典の試み」

モノとしての日中韓の書物の形状が右開き線装で似通っているからといって、書物の体裁が担っている制作の背景から享受流通に至るまでの経路がまったく同じということではない。一般に共通点よりは差違にこそ問題の本質が潜むというものだ。このことは案外見逃され勝ちではあるまいか。「十里不同風、百里不同俗」というわけである。

和刻本の国際共同調査・共同入力（注 1）を前提として、書誌情報を記述する上で必須と考えられる幾つかの項目（術語）について、日中両国で検討会を開くとすれば、差し詰め以下のような議論が交わされるに違いない。架空の議論の内容を以下に記録してみた。（我が国に所在する中国書の調査に当っても、同様な問題は存在するが、不可逆的な事例も多く、ここでは和刻本に限定しておく）。

（老驥）今回は「行款」又は「行格」が、果たして和刻本の記述にとって必須であるかどうか、やや細かい話であるが、どの程度普遍化できるか議論してみたい。議論の前提として『日本古典籍書誌学辞典』（1999年）の定義を引用することから始めたい。

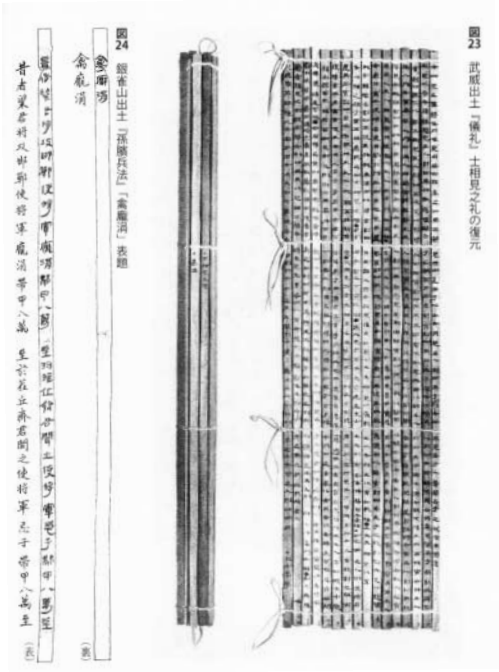
行款〈ぎょうかん〉〈漢籍の部分〉

一行の字詰めのことで、漢籍の用語。行格（ぎょうかく）に同じ。行款を数えるには半葉（一枚の半分）を標準とする。例えば、毎半葉何行、行何字（略して何行何字。字数が不揃いの場合は、何字至何字）と表記する。また本文の行と字の大きさなどの異なる部分については、小字書きで一行何字などと記す。同名の書物でも同版か別版かを知るのに、行款は版本を区別する時の重要な根拠となる。専門書に清の江標（元和の人、光緒十五年〔一八八九〕進士）の『宋元本行格表』がある。

（小林元江）

この語が漢籍の用語であるとの認識があることに先ず注意を払いたい（同辞典には同音の「行間」や「行間書」の立項がある）。

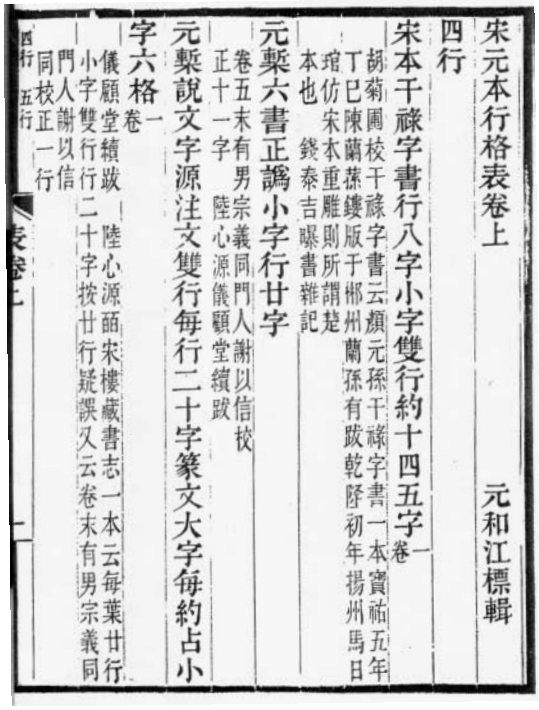
見開きの版面の情報（layout）としては大きく、辺欄・書口・行款（行格）の三つの要素がある。これは更に匡郭（版框）・界行・欄上欄脚（天頭地脚）・版心題及び丁付・魚尾・象鼻・耳格（書耳）・行款（行格）の八つ程度に細分される（中国書では版心に記される大小字数や刻工名が加わる）。一般に毎半葉の行数と一行当たりの文字数を行款（又は行格）と定義している。即ち、罫線と界行が半葉の行格を決定することになる。



簡冊の例（井上進『中国出版文化史』から）

行格は写本の罫線を継承したものである。書物には写本時代から罫線が存在している。もともと正確に写し取る上で機能したのである。仏典の場合、「開元釈教録」には一巻を幾紙で書写するかの指定があり、一行字数には古来決まりがある（注2）。そもそも写本時代の界線や罫線は、簡冊即ち木竹簡を綴じた際の、簡一枚毎の形態の名残りであるといわれている（図版　簡冊の例）。

馬王堆三号墓（長沙丞相軑侯利倉〈紀元前一九三年没〉の家族墓）から発見された帛書の一部には幅〇・七～〇・八糎の朱砂を用いた罫線（朱糸欄）が引かれており、五〇糎幅の帛書には一行六、七〇字、二五糎幅の帛書には一行三〇字前後の文字が記されている。（『長沙馬王堆二、三号漢墓』〈第一巻　2004年〉参照）。これも漢代簡冊の形式が受け継がれたものであると考えられているのである。


宋元本行格表卷上　元和江標輯
四行
宋本干祿字書行八字小字雙行約十四五字卷一
胡菊圃校干祿字書云顏元孫干祿字書一本寶祐五年丁巳陳蘭蓀鏤版于郴州蘭孫有跋乾隆初年揚州馬日琯仿宋本重雕則所謂楚本也　錢泰吉曝書雜記
元槧六書正譌小字行廿字
卷五末有男宗義同門人謝以信校正十一字　陸心源儀顧堂續跋
元槧說文字源注文雙行每行二十字篆文大字每約占小字六格卷一
儀顧堂續跋　陸心源皕宋樓藏書志一本云每葉廿行小字雙行行二十字按廿行疑誤又云卷末有男宗義同門人謝以信同校正一行
四行五行

宋元本書目行格表

簡冊の形式→写本の罫線（空罫――般には白界という）→板本の行格と、罫線の歴史も実に悠久であるといえよう。

さて、版種を弁別する場合、中国書で行格が有力と考えられる理由と、和本ではそれが余り重要とされない理由は、どこに求められるだろうか。

（C）老驥氏のいわれるように、中国で行格が重視される理由は、版種を弁別する上でこれが有効であると認識されている故である。

同一内容の書物でも出版時期と刻書家（書肆）が異なれば形式も異なるのが普通であるが、中国書では同一書肆によるものが、同じ版式をとる場合が多いし、シリーズものは同じ版式をとることがよくある。従って版式は古書の鑑定の上では大変重要な要素となりうると考えられて来たのである。例えば、

・宋元間刻附釈音諸経注疏　廿行、行十八字
・宋刻十行本諸史　廿行、行十九字
・臨安陳氏書棚本唐宋詩集　廿行、行十八字
・元九路合刻諸史　廿行、行二十二字

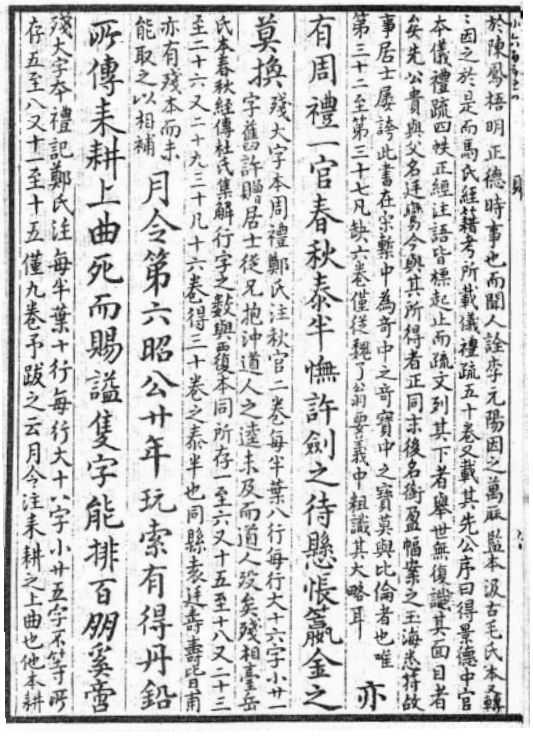
など。

行格の異同をみることで、底本との関係をある程度判定することが出来る。覆刻、翻刻（底本との関係は明らかであるが覆刻ではないもの。行格は同じであるが版面は異なるもの。形式上で底本との関係が判定出来ないものなどがありうる）の諸本の伝承関係を明らかにするためには、巻数・篇目・本文の異同と同等に、重要な手懸かりとなる。このために、行格は書誌情報として、中国書では重視される事情がある。

（R）日本では、例えば明版をもとに和刻本が出来る場合、罫線が無くなることが多い（図版　『明心宝鑑』の例参照）。

中国書には罫線があるのが普通であるが、和刻本では訓点が施される上で障害になるため、罫線が削られることが多く、訓点に連動して一行字数も不等となる。このような事情のもとでは、無訓の古活字本などの例外を除くと、必須項目としての行格情報はさほど重要ではない。恐らく実際には版種の区別は別の観点・方法によって更に微視的に（場合によれば師資口伝によって伝えられる技能として）なされるのである。しかし、覆刻の五山版や朝鮮版や明版を底本とする古活字版の場合、整版とはやや事情が異なるといえよう。

（C）版式の記載は明初の著作や目録（例えば『晁氏宝文堂書目』徐㷭『紅雨樓書目』）には未だ現れないが、版種の記録や判定の方法として確定するのは、清代以後のことで、蔵書家や古文献学者に広く行われ始める。社会変動にともなう古籍の流通が盛んとなり、真贋の弁別が必要であったことも底流にはあろう（図版　黄丕烈（1763-1825）『百宋一廛賦注』）。



百宋一廛賦注

版式情報として纏まった研究書の登場はかなり遅く、蔵書家として知られる江標（1860-99）の『宋元本書目行格表』（1897年）といった研究書が現れるのは、十九世紀の最末期から二十世紀初頭のことである（図版　『宋元本書目行格表』）。

余談だが、「元和江氏霊鶼閣所蔵書籍印記」で知られる江標の旧蔵書は、盛宣懐の愚斎図書館に引き取られた。この愚斎図書館本は幾多の酷薄な運命を潜って、現在上海の華東師範大学にその一部が所蔵されている。

『天禄琳瑯書目』『愛日精廬蔵書志』両書目に倣った田口明良『典籍秦鏡』（文化十年自序）、森立之（1807-85）の『経籍訪古志』（明治十年跋）には、行格情報が見られるので、清朝の学問の影響を受けて日本に導入されたものではないかと推定される。

経籍訪古志

以上の理由から、和刻本についてみれば、行格の情報は底本の判別に参考になるが、今日では書影式目録に書影が掲げられることが容易になったので、書影と合わせて利用するとより有効であろう。有名なところでは『中国版刻図録』（1960年）、少し変わったところでは『日本漢方典籍事典』（1999年）のような書影集や書影つきの書誌解題が今後ますます必要とされるであろう。

（R）版種の弁別に用いられた行格であるが、版本零葉集の鑑定には重要な観点である。更にはデータの標準化という観点からみれば、木簡学や古筆学等への応用が考

えられるかも知れない。

明版明心宝鑑

（老驥）書誌記述のための術語は、単純に対訳『図書館用語辞典』で置換して済まされないところがある。正確な定義と、何故そのような用語を用いて記述することが必要となるのか（或いはそうすることにどのような意味があるのか）、社会的歴史的背景をも解き明かす議論がなされるべきである。中世欧州世界に於ける版面のレイアウトが、記憶術と密接な関連があるとはMary Carruthers “The Book of Memory”（1990）によって教えられる知見であった。

内容的には中国書を覆刻翻刻したに過ぎぬかに見える日中韓の間の漢籍であるが、漢籍書誌学を準用するだけでは解決しないこともあるようだ。文化・習慣の違いを織り込んだ用語辞典を編纂することが望ましい。私どものプロジェクトもそれを目指している。

（注1）現在中国で中国高等教育文献保障系統（China Academic Library & Information System）により構築されつつある古籍DBは、人間心理にまで巧みに踏み込んだ、なかなか優れた共同事業で、中国全土の『総目録』の完成もそう遠いことではない。学ぶことが多そうである。
http://www.calis.edu.cn/

（注2）日中の仏典の摺本は殆ど無界である。これについて木宮泰彦『日本古印刷文化史』（1932年）は、和様版に於いては無郭無界であるが、仿宋元版の唐様版の普及で輪郭界線を用いることが多くなったと指摘している。恐らく、その和様版の特色さえも、宋元以前の版刻の影響を受けたものに違いない。

寛永版明心宝鑑

（文責：入口敦志、陳捷、山崎誠、山田直子）